

令和3年度学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	アンケート分析等からの分析と課題
1 生徒指導の方針・基準に一貫性を持ち、毅然とした指導で、基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚を図る。	① 挨拶を含めた所作の指導を、S T・授業・休み時間をはじめ、年間5回程度の「遅刻ゼロ・鶴高挨拶運動」で指導する。	学校に関係する方々にはもちろん、生徒間の挨拶も積極的にできる生徒の割合が、 A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	90.2% 判定A	自らすすんでよく挨拶している生徒は全体で90.2%となっており、前年度同期より0.1p増加した。前期との比較では2.6p減少している。(全体: R3前期:92.8%→R3後期:90.2%)学年別の前期との比較は、1年:91.8%→83.8%、2年:93.8%→91.1%、3年:92.3%→93.0%となっており、1・2年生で積極的に挨拶する生徒の割合が減少し、3年生は増加している。 今後も職員の率先垂範はもとより、「遅刻ゼロ・挨拶運動」の取り組み等を通して積極的な挨拶指導を図るとともに、学年・特活課・生徒指導課が連携し学校全体へ浸透させていく。
	② 望ましい服装容儀や規範意識の向上に対して全教職員が授業や学校生活全般、年間5回程度の「遅刻ゼロ・鶴高挨拶運動」で積極的に指導にあたる。	服装容儀等について積極的に声かけをしている教職員が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	90.3% 判定B	挨拶、服装容儀で積極的に声かけを行っている教員が90.3%であり、前年度同期の96.8%と比較して6.5p、前期の93.9%と比較して3.6p減少した。基本的な生活習慣の定着は重要であり、職員朝礼等の機会を通して教員の連携を図り、今後もきめ細かな指導を行っていく。
	③ 規則正しい生活習慣と時間を守らせることを指導することで、遅刻の減少に努める。特に朝の始業5分前に着席するよう強く指導する。	1年あたりの遅刻人数が、 A 20%以上減少した。 B 15%以上減少した。 C 15%未満の減少であった。 D 減少しなかった。	40% 判定A	前年度同期と比較して学校・授業間遅刻ともに全体で40%減少している。(学校+授業間(6~12月):R2:848→R3:505、内訳:朝遅刻:R2:527→396、25%減、授業間遅刻:R2:321→109、66%減) 遅刻が常習化している生徒に対する継続的な指導が必要である。(遅刻3~5回24名、6回以上21名) 今後も学年・生徒指導・家庭が連携し、粘り強い指導を図っていく。
	④ 「生徒チェック用紙」を活用し、全職員が連携して「いじめ」が根絶されるよう努力する。	「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	86.1% 判定C	アンケート調査の結果、いじめがなく安心できる学校であると感じている生徒は、全体で86.1%となっており、前期より5.9p、前年度同期より2.1p増加した。スマホの使用時間が長くなると、SNS上の書き込みや自分本位のコミュニケーションが原因のトラブル等が多くなる可能性が高い。 今後も、いじめ対策委員会やいじめアンケート等できめ細かな状況把握に努め、早期発見・早期対応を旨とした指導を行い、いじめの根絶に向けて学校全体で臨む体制を推し進めていく。
	⑤ 学校の環境美化に積極的に努め、校舎内外の環境美化も取り組むよう指導する。	校舎内外の環境美化にも取り組んでいる生徒の割合が、 A 85%以上 B 80%以上85%未満 C 75%以上80%未満 D 75%未満	91.2% 判定A	アンケート調査の結果、校舎内外の環境美化にも積極的に取り組んでいると回答している生徒は全体で91.2%となっており、前期より6.3p増加した。数値アップの要因としては、以前からの取り組み指導の浸透、それに加えた他の分掌とタイアップした行事等で行う校舎外の後片付け等の清掃が考えられる。次年度もこの数値を維持できるよう指導の継続、他の分掌とタイアップした取り組み等で環境美化に努めていく。
学校関係者評価委員会の評価		いじめは生徒の命にかかわる問題であり、根絶に向けての一層の努力が望まれる。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		毎週開催しているいじめ・不登校問題対策委員会や年間7回実施しているいじめアンケート、定期的な面談、校内巡視等できめ細かな状況把握に努め、早期発見・早期対応に努める。		

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	アンケート分析等からの分析と課題
2 生徒が安心して学べる授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）を推進するとともに、家庭学習時間の確保や読書量の増加を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。	① 様々な背景や問題を抱えた生徒を理解するために年5回の面談週間を設け、学年や教育相談委員会で得た情報を、学校外からも助言を得ながら、教科会でも共有し、適切に支援できる能力の向上を目指す。	担任や学年団・教育相談などと生徒情報を相互に共有して、個々や集団に応じた適切な学習指導を行っている教職員の割合が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	93.5% 判定B	多くの先生が取り組んでいるが、1学期より減少している。1学期にある程度情報交換をしているので、逆に、2学期は少なくなっているようである。1学期は教科担当者が担任や教育相談などから情報を得て指導の参考としていたが、2学期は担任の先生から授業や部活の情報を吸い上げる等の工夫して情報交換をする必要がある。
	② 話し合い活動を中心とした生徒が主体的に参加するための授業力の向上を図る。学校全体でテーマを決め、定期的な「ちょっと見週間」を活用し、相互に授業参観をする。各教科で主体的・対話的で深い学びの計画・実践・改善を行う。	発表や話し合い活動など積極的に授業に参加したと答えた生徒の割合が、 A 80%以上 B 75%以上80%未満 C 70%以上75%未満 D 70%未満	85.4% 判定A	前期に比べ5.1p増と参加したと感じた生徒の割合が増加している。講義調の授業からchromebookの使用や発表など生徒が自ら参加する形式の授業が増えてきた。しかし、積極的に参加していても、まだまだ主体的に取り組んでいるわけではないので、この部分が今後の課題である。また、積極的に取り組んでいる先生の授業のノウハウを教科の枠を越えて学んでいく必要がある。
	③ 個に応じた進学指導、就職指導を充実させることにより、自尊感情を育み、希望進路の実現を果たせるよう努力させる。	年度末の進学状況において、国公立大学合格者が、 A 5名以上 B 4名 C 3名 D 2名以下	2名 判定D	国公立大学志望者9名が学校推薦型選抜に出願し、1名が石川県立大学に合格した。入試の内容・レベルに合わせて各教科の補習や個別指導を行い、各自の志望先に合わせた指導をチューターが主導し行った。また、放課後の自主学習会を実施し、共通テスト受験に向けて士気を高めた。その結果、前期日程で富山大学へ1名が合格し、国公立大学への合格者は全体で2名という成果をあげた。来年度以降、より早い時期からの指導が必要であり、職員全員が連携して取り組む方策を考えたい。
	④ 各種検定・資格取得を推進するとともに、より上級資格取得に向け挑戦する意識付けと対策講座等、指導体制の充実を図る。	学年及び各教科が目標とする各種検定資格に対する取得率が A 60%以上 B 50%以上60%未満 C 40%以上50%未満 D 40%未満 ※合格者数／受験者数	漢字検定 17.2% 英語検定 26.3% 商業検定 83.2% 全体38.6% 判定D	求人数は昨年比若干増(485件→503件)で、機械系製造業は堅調であった。しかし、コロナ禍で昨年同様、食品製造や販売関連、宿泊・飲食サービス関連企業からの求人がほとんど無く、志望業種の変更を余儀なくされた女子生徒が数名いた。4～5社を応募前に見学してから、自己の適性を慎重に判断し応募するように指導を徹底し、ミスマッチがないよう留意した。 アルバイト就業を強く希望する者に対して（最終的には就職者数に含めない規定）、正規雇用社員に応募するよう、本人と保護者に理解してもらう為の効果的な指導を策定する必要がある。
	⑤ 家庭学習調査を行い、その状況を分析し、課題の出し方を適切に工夫したり、担任が面談したりすることで家庭学習の習慣を身につけさせることにつなげる。	家庭学習の時間を確保している生徒の割合が、 A 60%以上 B 50%以上60%未満 C 40%以上50%未満 D 40%未満	62.4% 判定A	漢字能力検定では、全体の合格率は17.2%(17/99)、級別では2級0%(0/1)、準2級15.2%(5/33)、3級18.5%(12/65)という結果であった。 実用英語技能検定では、全体の合格率は26.3%(5/19)%で、級別では2級0%(0/4)、準2級37.5%(3/8)、3級28.6%(2/7)という結果であった。 商業の検定では、全体の合格率は83.2%(331/501)であった。検定別では、簿記実務検定で2級60.0%(3/5)、情報処理検定で1級28.6%(2/7)・2級41.5%(17/41)・3級68.4%(26/38)、電卓実務検定で1級77.5%(31/40)・2級68.4%(52/76)・3級78.9%(45/57)、ビジネス文書検定では1級46.9%(15/32)・2級55.3%(42/76)・3級82.2%(83/101)、商業経済検定でマーケティング40.0%(8/20)、ビジネス経済A 87.5%(7/8)という結果であった。 各資格に関する興味関心を早い段階で引き出すとともに、合格した達成感を持たせ、上級資格取得に対する強い意欲を持たせるよう指導を継続していく。
	⑥ 学校図書室の取り組みを活性化し、積極的に読書に取り組みさせる。朝学習で読書を取り入れ、本に触れる機会として図書館での貸し出しを促す。	図書室での年間貸出冊数が、 A 1,500冊以上 B 1,300冊以上1,500冊未満 C 1,100冊以上1,300冊未満 D 1,100冊未満	966冊 判定D	特進クラスを中心に、週間課題など家庭学習の時間を確保している。今後も継続していきたい。他のクラスでも定期的に漢字練習等、基礎・基本の定着に向けた学習課題に取り組みさせることで、習慣化できるとよいのではないかと。1年生の学習習慣の定着度が低くなる2学期以降に、家庭での学習を促す取り組みが今後の課題である。
学校関係者評価委員会の評価		学業に前向きな生徒ほどALを好む傾向がある。話し合い活動等に積極的に参加している生徒の割合が高いのは良い。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		タブレット端末の活用等により、生徒が自ら参加する授業が増えてきているが、効果的な導入には教員間で温度差がある。教員総合研修センターの活用や積極的に取り組んでいる教員の授業の成果物の共有を通して学力の保証ができる利用の在り方について学んでいく必要がある。		

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	アンケート分析等からの分析と課題
3 教育活動の速やかな情報発信と地域社会と連携したボランティア活動の推進で、地域や保護者から信頼される開かれた学校づくりに努める。	① 中学生やその保護者に本校の教育活動をより理解してもらえよう、志望者に対して部活動状況を発信する等、ホームページのタイムリーな情報の発信と内容の充実を図る。	ホームページの月別アクセス数が14,000件を上回る月が A 10ヶ月以上 B 8ヶ月以上10ヶ月未満 C 6ヶ月以上8ヶ月未満 D 6ヶ月未満	7ヶ月 判定C	月別アクセス数では、昨年度月平均数14,000件を6月、8月以外の月で上回った。10ヶ月間累計でも昨年度同期比29.1%増の約172,480件と大幅に増加した。月別推移では1学期はやや低調ながら、2学期以降に増加傾向にあった。部活動のアクセス総数は24,099件とほぼ昨年度と同値で、柔道部、ラグビー部、野球部、陸上部の順に多く、特に野球部では倍増する等、注目度が高くなっている。更新回数は減少しているが、生徒コメントの記載や内容の掘り下げ等、質的な充実がアクセス数の維持につながっている。 次年度よりGIGAスクール構想による生徒1人1台の端末環境が本格化するため、画像・動画を活用した内容の充実、授業での学習成果物の配信等、新たな環境に応じた本校の特色、魅力の発信するための体制づくりを整えていく必要がある。
	② 生徒・教職員・保護者が一体となり、手取川歩行や花いっぱい運動、エリアクリーン活動等を通して、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組み、地域とのつながりを深めていく。	地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組むことができたと思う生徒・教職員・保護者の割合が、 A 75%以上 B 65%以上75%未満 C 55%以上65%未満 D 55%未満	45.9% 判定D	中間評価に比べて全体で12.1%の増加があったが、目標値には届いていない。全校生徒で実施している花いっぱい運動や、部活動単位でのエリアクリーン活動、学校行事の手取川歩行や地域探究会が主となり実施している舟岡山清掃活動などの各種行事について生徒全体に周知し、生徒の理解を深めるとともに個人や部活動・クラス単位での参加を促していきたい。
4 教職員自ら、これまでの働き方を見直し、限られた時間の中で、教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保できるようにする。	① 各教職員が自らの勤務時間や業務内容を的確に把握するとともに、毎月の業務の流れの中で先を見通し、区切りを意識した計画的・効率的な遂行に努める。	毎月2回設定されている定時退校日を意識し、実行することができた割合が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C 60%以上70%未満 D 60%未満	56.7% 判定D	定時退校日を意識し実行することができた教員は56.7%で、7月の調査より2.2pの微増、D評価であった。4月から12月の時間外平均を比較してみると、R元年度は45.7時間/月に対してR3年度は36.8時間/月で、8.9時間の削減となっている。また、80時間以上超過勤務者も、延べ22人から10人へと減少している現状もある。 (R2年度はコロナにより4～5月休校のため比較対象外) ここ数年の取組で超過勤務については改善傾向にあるといえるが、より計画的で効率的な業務への第一歩として、定時退校を意識しやすい退校日の設定や啓発に取り組んでいく。
	② 部活動において、顧問と生徒が部ミーティングを通して共通の目標を持ち、活動計画の中で技能向上を目指して効率的・効果的な活動に取り組む。	目的意識を持ち、効率的・効果的な活動に取り組んでいる教職員、生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C 60%以上70%未満 D 60%未満	教職員 83.9% 判定A 生徒 84.7% 判定A	コロナ禍において、様々な制約がある中での部活動への取組であるが、目的意識を持ち、効率的・効果的な活動に取り組んだ生徒が84.7%、教員は83.9%、ともにA判定であった。今後もこの状況が続くことが予測され、ミーティングや個人ノート等の活用により全体および個人の目標を明確にし、より効率的・効果的で質の高い活動を目指していく。
学校関係者評価委員会の評価		自然豊かで不自由ないこの地域について理解を集めるとともに、学校の魅力が中学生に届くような発信が必要である。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		地域と密着したボランティア活動の実施とともに、ホームページなどターゲット（中学生、保護者、在校生、地域など）を明確にした魅力的な発信のコンテンツ（ドローンの利用や生徒の生の声を活用した記事）を充実させる。		